

## シーボルトの遺髪

シーボルトといえば、江戸時代に長崎・出島のオランダ商館に勤めた医師で、御禁制の地図を持ち出し、日本を追放になった事件の主人公である。

つい先ごろの新聞によると、そのシーボルトの遺髪が生誕二百年の一九九六年五月に、五代目の子孫の手で長崎に届けられることになったという。

シーボルトは死に際して、「私は、美しく平和な国へ行く」といい残したというから、遺髪はまさに日本に里帰りすることになる。その遺髪は、シーボルトの次男の未整理資料の中から見つかり、台紙には「愛する母によって切り取られた、忘れ得ぬ偉大な父の髪」と書かれていたという。



シーボルト



イネとタキ

さて、シーボルト（一七九六—一八六六）は、江戸後期のオランダ商館のドイツ人医師であった。彼の家は、ドイツの有名な医師の家系で、ウエルツブルグに生まれた後、一八一五年ウエルツブルグ大学で医学と博物学を学んだ。その時、大学にはデルリングエルという有名な解剖学教授がいて、彼は師の家に寄宿していたという。

その後大学を卒業し、一八二三年二十七歳の時に長崎に着任するのであるが、その時彼の懐には、紙に包まれたデルリンゲル教授の頭髪があった。日本でも出征の時などに、忘れ形見として髪の毛を切って置いていく習慣があったが、彼もまた、遠い東洋の国を目指すに当たって、相当の覚悟であったのか、恩師に髪の毛を所望したのである。

当時長崎のオランダ人らは、広さ三千九百七十坪、おおよそ六十五軒の建物と小さな空き地を持つ「出島」の中だけの生活をしてきた。南口の制札には、「禁制。出島町。一、傾城之他女入事……、一、断なくして阿蘭人出島より外へ出る事、……」とあり、彼らはここを「国立監獄」と呼んでいたという。

しかし、出島での診療と、蘭学者・医学者との交流によって、「出島に名医有り」の評判が立ち、長崎奉行高橋越前守などの好意も得て、シーボルトには市中の病人を治療するという目的で、かなり自由に外に出ることを許可された。

こうして、長崎郊外の診療所を兼ねた鳴滝塾で、日本人患者を診療する傍ら、高野長英、伊東玄朴、戸塚静海らの門人を指導した。

一八二六年には、商館長の江戸参府に同行し、その際に気圧計、湿度計、寒暖計、クロノメーター、六分儀などを持参し、下関周辺での深淺測量や各地での経緯度測定などの測量を行った。オランダ人といえども行動が厳しく規制されていた鎖国の時代に、これらが実施できたのは、三十歳になるかならないかの若いシーボルトが、医学にもその他の学問にも、並みはずれたものを持っていたからであり、周囲の奉行や通詞らがこのことを、正しく理解していたからでもある。

ところで、シーボルトも人の子、日本滞在中に心底愛した女性がいた。十五、六歳の頃に長崎・丸山の遊女となった「おたき」十八歳である。知り合い、結婚したのち、彼女は女兒を出産する。

子の名を「おいね」といった。

一八二九年 九月、一説によると間宮林蔵の訴えによるという彼の事件が起きた。厳しい取り調べの結果、沙汰が出て一八三〇年十二月に国外追放となる。「おいね」二歳八か月の時である。

この時シーボルトは、漆塗りの小篭を作り、蓋の表に「おたき」の、裏面に「おいね」の姿を貝象眼させ、さらに母子の頭髪を紙に包んで持ち帰ったという。「おたき」の毛髪は羽織の紐のように編まれたもの、「おいね」のそれは、一見して混血と分かる茶褐色のものであった（象眼の小箱は、その後楠本（おいね）家に戻された）。

従来日本では髪に関して、「髪置」という、幼児が髪のを初めてのはすときの儀式と、「髪切」といって、遊女が客への真心のしるしとして、髪を切って与える、そして「遺髪」という習慣があったというが、彼が母子の髪を持ち帰ったことと、これらとは無関係である。

なぜなら、恩師の髪を懐に來日し、愛しい母子の髪を持ち帰り、死後には現地の妻が彼の遺髪を保存したこと。また、彼は懇意にしていた最上徳内、間宮林蔵の両名にも、自身の髪を抜き瑠璃の器に入れて形見として渡したという話もあること。このことから、シーボルトあるいはシーボルト家には、髪に対する特別な思い入れがあったのではないかと思っている。

いずれにしても、思い出の日本を離れる船上で彼は、小篭に描かれた母子に視線を送り、包まれた髪のに触れ感涙したであろう。

「遺髪帰る」の記事を見て、思ったことである。

#### 参考文献

「江戸参府旅行日記」 ケンペル著 齊藤信訳 東洋文庫

「シーボルト先生」 呉 秀三著 東洋文庫

「甲子夜話」 松浦静山著 東洋文庫